誹諧寐琴

地

俳諧寂栞巻之中

白雄坊選著

拙堂増補

昭の事

昭とは字の眼をさゝめてのち親句を半ばへ〳〵字の眼を徙るみゝ十七式まことしく句まことゝ形へとゝゝい上下の論あり

陵さるゝの

八九間空よりの落るる柳　翁

まゝの鳥の圓なる夢　沽圃

見そ情の宮所をけるめるる

泝川集

苅株や水田のうくの秋の雲　洒堂

芒るるるる日よ代かける屋　嵐竹

見そ舟るる場の出るゆくよ時るを

宮所よさるめるれる

炭たるる

掘るるるよの川と日のかる山路く　翁

少るるるるる雑るる乃時るる　野坡

見そ舟るる場も時るも出るるゆくる

半く時るをめるるる行る

さるるるの

市中いのの白しや夏の月　元兆

切の清しるる門くの琴　翁

大石田雨乞

水月ゐをあるめて玉宮上川　翁

岸ホ陸るるるつるる赤杭　一葉

見そ歩舟の行るる歩舟の行るいあと

いるるる軒垣寒樹と城くるを見

先くく流るるるる川といあるの

るるよ舟といるるよ流川といあるの

るるるる流るるの弦を見へし古式云

吉野山姨捨山よ月と流るい

よ見そ姨捨山よ月よ姨捨山るる

あ〜たけ親船のこゝろかなるひ〜るみてもみふし　ちろえと

ちろがむら

ちゝの松世ゝとゝ人ゝ浦のを　加生

暁こゝろ岩手へうゝの月　其角

見てゝゝ人合の船をてゝ合ふ浦よ塩海よ山さのとみるゝくてゝいとよのくてゝ合ゝのゝ　ふゝふゝ人しゝ

あゝ世集

ほゝゝゝ世ゝゝぬゝ心のゝ打もあゝと　荷兮

あのゝゝ船ふゝ半てゝ戸の口　野水

見ゝあゝゝの酒ゝ酒ゝぬゝ心の打もあゝ
ゝゝはゝゝく待といゝるゝゆゝゝるの
ゝゝゝゝゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちゝの日

蛙のゝ聲て打しをゝ孫さゝ哉　野水

新ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　旦藁

見人情の船を人情の船ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝ

ゝる士のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ秋の雲　野水

指の横の篠はらをとる　旦藁

見はる笛の紐をとる笛かかるのてくく
はるとりくへなるを横よりてくく古式なり
ちらあるをとるみ弁るの紐をさくとるふ
なるをい上下の編形しこまちこと形の
結をよりくヨをきくて陪爲

ひさこ
ひろくの君も陪きくしまちの笛　珍碩

くくをて掾の義ハさめめふ　公羽

くくをふ紐笛の紐を結を文字
あるつして笛しをさくかかくのてく
をあ無ふてて笛ふ紐結をあるの
をくくへのくくを自ゆの人なくてふ

好むをくくを

冬の日
雲月や鬱のはくくをあくひ舞て　荷兮

冬乃朝日の衣形のをを　公羽

見もをふ紐みあくをふあるふ
ざくくこれいふ指ををくくしくを也
舞るのをあふ笛よ陪つせらんし
形をあ笛くくを自ゆの人をくくてを
くのむへくくを

泉川を紙尾をくはて

ひろ
一人くをも志はふ世のをかくひさや　越人

酒ちかなくらふるの比の月　翁

見舞答の招に遠路を
ものうしと断るに人の角のるを
真ゝまの自のるを断るゆへ遠路を
客あるを亭主餞別をうくる
招状あの招るの比断たり

元禄小文庫

新雪八日ごとすゑ遠ゞ　山店

又お蚊面のこゑ　翁

見餞別のるをうきゝを

新庄の亭弘

清涼ゝ亦岩坂　彼を蚊屋　風流

たゝめて芸ゝる風の松ゝるの　翁

見真ゝを多ゝる客招のるゝるも
遠ゞ謝ゝを時分の法もらよ也

後日記

ゝるゝして又ゝ也吳淞の田植歌　如行

見なるゝゝん不破の山ゝ来ゝ　公羽

見亭主多ゝる客招ゝ吳淞ゝらふゝ
ゝの国の角新を断ゝる例ゝ丹波の
ゝるゝて不破ゝらよ美濃ゝ謝ゝ
あゝゝゝゝゝ

ゝのゝ

炭ゝの日ゝ妻ゝ新ゝ　重五

人の物いを鏡 麿 荷分

[illegible]
暗吟や弓矢を捨て十四年 去来

又[illegible]ぬ[illegible]の小刀 嵐雪

保川集
年ひとの危よ桃の花かくむ 酒堂

猿蓑[illegible]の琵琶のしらべ 素堂

[illegible]
人[illegible]

補

[illegible]の巻
[illegible]の魚氷室 藤白

金涌の郡豊浦の春 千春

[illegible]
[illegible]

廿三の事

宇陀法印
陽炎や野辺の牛の抜ぬきて 翁

[illegible]の日
野菜中[illegible]の[illegible]の抜折て 〃

[illegible]
遠原の蕨の初物人うえ[illegible] 野水

とものゝ山
來るまでは用意するらん小貝拾ひ　嵐雪

ひたちの
西風に十寸穂の小貝拾ひまて　泥土

こゝにて留守あり

あつの
ひきすてし車も琵琶のかたわれて　野水

是みて留之る発る弥留のとゝめ侍る三
みて留守を嬉しく哉ハみるまゝ徹まきれ
むしきほとるゆへ之

さるゝの
秋霧さ殘く人ふきる月夜に　野水

小文庫
馬時のるてさりしまで牧の野よ　公羽

こゝは不留なり不留の事こそ下のよの
よきかへさるまゝはしらぬし
きもしれい

月のきふなきしへてれ秋露
牧のみまる時のるてさひしさ
かくつくるへし

茶菓の岩まての田をまち毎に
きしいるを心よもかくをもよきくさ
をぬくるくふおきへし

けのゝ社
落穂その田くその露座よめてはらん　公羽

さの川あ仙
冬せさて意を床の石や雪ならむ　曾良

見らん留こらん留ハよまうくちひの
こゝろ地あはしさなくてれとみつゝき
顔ひの詞を
やはり いはを いはふ いくさ
たえ かい ありて 行
こゝろの詞をよくすへし

あくせ
夕霧深ミよりて何とやらん　冬文

けるよまうくちひの詞なりし深ミよりて
やとやの文字をとる中にてあらるゝ
「久しきのひかりのとけよまちのりけ
志つかなしき雪のちるらん
志らぬなしいふて花のちるらんといふその

詞をこめさるゆへありしゆへの結びも見え
それ志らあれとよまりくちひの詞
をつゝりて子細なし

ひばりの
雲雀鳴小田に土もつ比なれや　翁
ことや留主り

深川集
山里の竹に縫へるくも涼し　嵐蘭
見もなし留しすれや留こゝあし留別に
子細なし名つるのはなし中のち
見ゝるへし寐る十分の結組みらのらくね
おもこそ中の結ことを知りまてゐるの
留みもせよまちけ　たのしみを中にお
つくる也

冬の日
花蕣馬骨の霜に咲かへり　杜國

是ハ字仮名の中ニ五字仮名の中ニ
をいひきよ下の二字をうかゝひのきりニ
ありかのを見るし

仮清屋　門柱

これらのうつハ仮の清屋門の柱とまに
於のるとてよそのの字まあし

時為　机　筆

ありの中ニひまに於ゐるまさるゑのまかゑ
ゑし

ひさゝら
嵩ちその門かくに鳴し夜の聲　玲碩

右ハえよりかくまにこえののるまてはなし
いつきめるさけ一るのみさゆのをこえにし

餘句他季ら津ての事

ころもの
かさ形る草子絵なりしく秋きて　史邦

太きんをのれんさて女きんの足袋　允兆

日
是ハのおそるし菊のつぼむころまで　去来

鯨つの七尾の分ハ経ら哉　允兆

又

深川集
洗足に客と名のつく寒さかな　洒堂

綿籠なるゝ如くもとの里　許六

鶏鶏階ゝの猛をつゝしまるゝ　翁

まちとこちゝ十種もとらん　嵐蘭

月の色ものちるゝ小鮒賣　六

簾地のゝゝよ典薬の駕　堂

相國寺ちゝんの花のちりて　蘭

橈の蓋しる蕭ゝ行のゝ　翁

かゝハるの内新のゝ形きあてちるゝ

尤好むとゝあゝよ一巻のゝ舟ゝ

ゝて百負ゝ歴ゝ紀ゝ知ゝ　みゝ

ふゝとゝ移ちゝる夏

ゝのゝとゝるゝゝ霧ゝゝゝ也　野水

花ゝちる兎ハ西念ゝゝゝも花て　翁

又

ゝゝゝ

屠ゆゝ方や白ゝ花ゝ松　翁

千ゝゝゝむゝのゝゝゝの一兎　因　珍碩

かゝゝのゝゝ花の実ゝのゝる秋ゝ

ゝゝゝゝゝ時ハちゝるもゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝの跡ゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝ

なるる沙人子をうけていろんの
雲のよも踏らるゝなりの悔まき雲たるゝ
ともはるの秋八月編み雲まも踏らる
ちるゝこゝをの山を得てまゝ人〳〵

藪へ　彼岸　峯へ

なるゝの春〳〵春秋二雲ちるゝ
ゝの花のとゝのいてゝなるを

補又

あるゝこゝ二雲組
夕ちるのゝをは雙ゆる雷の雲　楚竹
るもゆるゝこのぬ山陰の雲方　東驢
小雪鹿のゝをゝを袖ふ射つきゝを　公羽

花あるふほゝゝのゝんなる月　越人
こゝしよかちをて花のふゝゝ月　荷子

又

秋庚京組
ちゝ降ゝぬ打ゝちのゝと肥ゝゝ　如柳
萩踏まけ行ゝ猪の法ゝ　公羽
他雲ゝゝふゝゝ秋雲ゝゝゝ踏
ゝなりをこるのゝみゝやゝなゝい
ゝゝしし

二句一意の事

冬の日
秋蟬のからに声きくえのこさかし　野水

蕨乃実はしよ栗おつちる　重五

又

冬の日
むさしのの帛ゑてはふく世の中に　冬文

雲に紛二枚も厚よ家庵　越人

又

ひるかほ
静なし旅よそゝの気質に行き　去来

こみけをころ風てむきゝ水引　嵐雪

又

須加川呉仙
こりしさや湯ちるも定く奇る冨に　翁

教え石の下たしふ　ゑ　等窮

二る一ゑを於るま此のくしてあるゝるゝ
うく発句をきくる俳をちうく継へし
きれくてを附句すの

㊊又

ひるかほ
牛家をほのく畑を越てしに　謡和

山庵さきもとよふや雪も町　丶

又

いとこの日

おもしろゆのむしろ衣人農うへくも　鴻山

考ふんさうも富る秋の戸　執筆

ここくのるもさとゆて一巻のうすかや

ちりくし

俳諧の縁ないと一巻の世をくろふなりかみ

さくへ一るふて功をけんとさるしさ

一巻こゝみくゝきこの世欲をさをつゝめ

一巻うをうくさくし

於もこの什の本

あこう世

うくこゝる涙はる眶こゝとゝまゝて　越人

靜はおよ詩をさゝむ家　其角

又

ゆくの日

翌ゝて敵へ着ゆゝて移む　重五

小こゝよ屋ゝゝせひうゝ祖ひ　翁

又

さるこう

發句のそゝよゝ誠る鈴鹿山　翁

内義頭ゝゝよ色いくゝを　乙只

又

ゆくの日

百ゝ腐つくゝて毋の喪ふへ　野水

元政う草の袖もやゝぬ角し　翁

又　　越人

三の日

咲ほけの菓子もみさを白露そ

秋の和名よかしは　順　　旦藁

秋もほけの月はさすかのあるあるおる

所なるともふそんはあらんしさとしへい

秋雲のよ雲あの雲はるる雲のよ也　篠乃

所なと所てふ所ふはらぬと志雄のるよ所ふい

るの和なし所るもせ田の合戦よ秋雲よ

なと所てと所さるこ

補　又　　曲翠

添川集

頬あてそれそらして月をうちまもる

悪七兵衛景清ゟ秋　　洒堂

名所を名所を所ふ事

添川集

添草ハ女とのうの下あるさ　　洒堂

伏見の雲をの相ふさく　　曲翠

てさ添ふうゟ伏見とみるさくて所さるこ

宇陀法師

世をいい舟の彩ひの兎延山　　許六

庵舎の温泉をトふえ所ふ　　李由

ちるさ舟のさるふして所さるこ切へさ

このみぎりの名所地名好み多くして
踏らるゝなり

泳川集
初花や伊勢のあそびのよれ初て　翁

えぬき茶屋宮川の上　嵐蘭

是伊勢といはず当国の名所を踏らるゝ

笑ひの葉
補
いさよひは不便や姨捨の月　翁

散る花を垣根を守つ嵐宿　嵐雪

これは旧国の名所と旧国の地名を踏

まうるこけのみもそひあつまりてなり
てしみそこもいそらそさそへて名所の名所
を踏るもすれ芳紙まりのを頭くし

名まし紀路の事

句解百員
敵の務あるむさしのの声　千里

畠明尓和栗みちの鳥囀る名所　翁

汻川集
又
山伏を切てかけるの関の前　翁

寝ころ松なかぬ世の中　酒堂

又

須磨寺の日

須磨寺の所の流れ　重五

みのゝくに泊を出るとく　荷兮

又

ふるさとの

ふるさとを捨てかゝらぬ捨ちし　允兆

みりしかるとも死ぬよ　史邦

又

あるかぬ

なのるも長安をとゝ名利の地　翁

長の名をとゝ名を問るを　越人

ゝゝゝも一巻のうちなりとゝるへし

大勢の中の人をゝゝむるる法

ゝゝゝ

ゝゝゝ俗の涌湯の夕暮　曲翠

中しみもせんの高ゝ山　休翁

又

白雲

ゝゝゝひまる清潔あゝゝの人ゝ人　其角

霧ふゝ風やゝ家の編笠　丶

ゝゝゝゝの外もむきみてゝゝ

こゝろざし月の事

松風にまつこぬ夜の酒の酔　羽笠
笑のこしたる無名の月　執筆

又

黍の穂は残りに風に吹かれけれ　野坡
馬場の喫稀の端にさゝむ月　嵐雪

是ちかきこゝろざし月の古式こゝろの月は松嶋の
月をさとりの月といふを加ふのこゝろ
硯にありし雲をあらし月出ありたる月
ありし涧の月より縁のはしまでみえし

無名の月　橋をかく月をよし
涧の月の字の縁をもちて名をとり
縁をつけて月とあ字に標とよく
あらわす

又

世の暮は田安をとらぬ破籬かな　園風
揚沈耗させて走りし月夜かな　猿雛

古集にあらくのこゝろの月はあはれと
古式をもちいし事なし

㊫他の季の花続の雑桜の事

名解 高貴

稲荷の社の花の色ふかし　拳白

秋雪みて花を降るに月を伴ひ
降るを一実の話よりて他花
雪の中の兼を降るに他の雪の
反秋の内まく正花なるへきを降
降るのうち又雪の花とつもあるとも
きけしと元禄の正風をよんあてしまひ
ちよりとすと哲のちのうるとに成ぬて
なまへからを

源氏の物語

花火うちるも水の仇さを　一禮

雪を張合の秋の花を名月

意日二条殿

ふりうり不かを考て花のふるうち　荷兮

雪をみるの花を名縁へ一おふりて
をうのよ降へうを

俳尾集

花ふ荷をきる場の酒　義　翁

雪を張るの花を花の花のかをいふ
て降るを花よりこれを雪といふなを花を

かさま

花ふ赤んよ月を徹夜　路通

雪を張るみを月をとををうる

茨木

世鶴の陰鬼も多紙を月を花　翁

こををを雪るみを月花を張ふるを

浮川集

踏ゆきて[illegible]の雪の新月夜　岱水

[illegible]の日

旅衣笠よ[illegible]をうち拂ひ　羽笠

[illegible]といふを[illegible]と漢語を用ひ
なれの[illegible]も[illegible]なるべしなるの

[illegible]の

糸撫腹一[illegible]の[illegible]　去来

[illegible]の[illegible]

こゝ[illegible]ふむ[illegible]の撫吉野山　仙化

世[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]他の雪の花[illegible]の花さく古人も
[illegible]

補　あを[illegible]の事

[illegible]

花の[illegible]山　越人

田[illegible]を咎て[illegible]を　ロ　翁

又

[illegible]田之房紙

常盤山[illegible]の[illegible]花[illegible]　桐葉

[illegible]の[illegible]連歌師の松　叩端

[illegible]文[illegible]の揚るかのあるハ[illegible]

一巻のうちの容易に所望するあり
とて書るの意なり翻訳せられ
所へ〳〵に移賀の巻を形〳〵に祝賀の
意のこゝろの絵詞なり〳〵是非の意を述べ〳〵扨
みも掲るの俳あるを疎墨に法〳〵
當時の絵詞あるを
張りて巻を軸にみなうるつくる

ちの日

見はるかすの廿九日の月雲ま　荷兮
君のつゝえに氷ふまれけ　羽笠
こゝろにあるあ無筋のはけるもの

山中の巻

持持てあそむ花もちのかゝを　翁
酔狂人と孫をとゝ引　執筆

これは北枝曽良祖翁と山中の温泉
越ひ〳〵こゝの冬のはけるこゝろ

結茶の技術

古うちもすゝ蕎也寒〳〵ぶを　野童
鬼貫真を馬楽堂とゝ　瓢界

こゝは鬼貫花賀の詩亭の賀のあるこ

ひとり半

廟中つる幣帛小胡蝶の中迄く　調和

調鳥ら母の齢ひこまつの日　調和

てゝゝゝ調鳥ら母の年賀の巻のあけ
るなり

海竹集

陰ゝの小鳴かゝゝる花さかを　乙孟

ゝゝゝ八重桜の枝　沾圃

ゝゝゝ舞る哉留めてなきは小かゝはを
る下ゝ留ゝも陰ゝゝ

連歌ゝゝ桜ゝ花をも陰る紙ゝゝ
ゝ陰ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ花を桜
陰ゝゝゝ陰ゝゝ徳田

おるの正花めゝゝゝゝゝゝゝゝを
陰ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きゝゝゝ

窓句の変

ゝゝの日

庶ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ男　荷兮

緑ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ根陰ゝゝ　翁

又

ゝゝゝの

大徳ゝ所ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝを　半残

死ゝゝ湯紙のゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　土芳

又

炭たゝく

うゑ草の千葉きたむもうの宮　野坡

るゝ出ぬはいつ内て炭をる　翁

又

あゝ野

きぬ〳〵やあるとかれそくひて冬ふ　翁

風ひきたるゝの野のうはを　越人

又

くるの日

新物とゝ寒よ梓巫女居る　雨桐

異説をもめぐる種に切ゐし　荷兮

ゝゝゝの話ゝをゝゝ

一るの情二るの乃情ものを言てきる

句のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一るゐて拾るこゆつよ女婦なし出てもる

俳ふゝものをゝるとをを見ゝのるの

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

補　句かゝの事

仏者の句ゝちしる道の屋

ゝゝゝゝ集のるゝ古人の集とゝ

ゝも一覧のゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝるゝゝかゝゝゝを経ゐゝゝゝも

古人の名ニ恐るへからす 拙さるハ
それまても猶しくと思ふへし

早乙女の屁ひれあるく笈 釋
口すさひさる人の背中

句ハ東都にて蕉流と唱るその
集中にあり 意のるい出んとてから
さりれるところあるゝなるてなり
釈子兄弟君臣の間にてそれのまれぬ
ところ句の但風流といふへき所
もなし

涼川集
掛乞に意のさらりとさせそや 公翁
かくいひて意の情も風流もあり

まくらのこともみのかくつよくさへ合も
らるへうしを詠清玉淡といふ意し
意のるハ西そさゝゆも涼切にもいふへし
むまの句にもかうらへきて一句のうへの風
流二句の名の風情をみつきらとすへし

行水の附而月をさし出ひて
系筆ら稀ハ発も情存知

こゝろうの句ハ平来あ芙渠尾張画
流りせしるそといふあるのなりたる句の
間なりし当附芙渠尾張ニけるの併を
いつもの心とらゆにのとらハ暁臺士朗なとの
出く元禄のむかしに復せし ゆへにそあ
蕉翁の忠ともいふへし

百姓吉人 伯母の義の

[illegible]

孫 [illegible] 孫の俗風 [illegible]

[illegible] 有ハ [illegible] 吉なるべや

[illegible]

[illegible] 意をして

百姓かうちゐ [illegible] 雪の少將

と [illegible] 角の [illegible] 人も孫 [illegible]

[illegible] 路 [illegible]

[illegible] 上 [illegible] 同 [illegible] 有る

[illegible] 品かつ [illegible] る意をして

[illegible] 世の黒ハ 北小町也

と [illegible] 孫子 [illegible] 人の [illegible] 作安

[illegible] て [illegible] 源 [illegible] と [illegible] 角 [illegible]

非を [illegible] 白 [illegible] [illegible]

[illegible]

藤白二句の百姓屋の事

[illegible] の町ハ [illegible] 黒

ひと声 [illegible] 松 [illegible]

[illegible] 時 [illegible] 理 [illegible]

しるたゞ日向て町のあれゝらぬ旅寝
見え隠れいろいろ有なし

雨の青藤を津ゝ　六代雲也

亭主ふかくも操の山伏

こゝろさしつとあさあし藤るハあるを猜
家その中人ゝは虎せさる国のゑ由
いふりけるとしもなるへとゝく
古人曰藤るを浅川をとゝろく故
不知とうろふ以くもして一るゝゝ風情ふ
似くし

坊主の連ハ法細て風ひく
ことしるの野座ふよ。

さゝらの
畑より田の青苗させてはさゝ竹に　凡兆

加茂の祭ろさよ紀杜の雪　公翁

白集
火とめしの宮ハの寺る峯の寺　去来

浮き御法堂法華在寺　公翁

こゝもろハ日をもて亀鳴てつまろ気ろくと

藤る結ぎのあかつひ

若葉とて
藤の門に婦くは藤ふ在の　曽良

かゝる淋しき野の八野中の地蔵堂　露丸

書をよまぬ山犬の声　公羽

蹟を尋て栗

笠かたふむ松の扉をたゝくなり　真角

夏草をそろゆるひるの偷り

新あるく都の秋のあつさを　敏足

韻墨

いろ世をうるもまつへき麓こそ　弐水

琵琶をかゝへて出る祭物　公翁

晨明より畏ゆかしきの小方丈　託六

萩の露

ひとつ〻なる命を拾ふて鳴るゝ　彫棠

蝶舞りなきほを秋よなの音　横几

あり〻のすゝ形ゆ巣のきゝこゝの　公羽

立秋

雲の外猪を屠るゝ松をゝて　露沾

履をたゝむ石の苔　沾荷

八月の薄紙ひらる武者一人　公羽

玄の日

、

屋〳〵ことに一家に貴を法とく世尓　荷分

仏体　乳をかくるひのつゆ　昌桂

雲ん拂ふ鏡よ人世の影うつる事　雨桐

涼川集

都をいで玄奘の行脚よ思ひおこす　利合

問ん事ゆくゝ釋迦堂の暮　洒堂

笑ふあて思ふ人後もさすらへ歩　翁

、

とうとう山

鶯と翼の雲ひなれさる　支考

陸奥の里をもしてふちかこと　丈草

嗜ちこ笑ふものゝ出へき　翁

合日集

、

世ゝ京をとよのふつゝをとて　涼山寺　其角

乳人用ゝの貴をとりあて　我峯

ちゝ　やうふ其をさふのも倫のみて　嵐雪

ろをむ

、

深かゝくを閑れ出る数　其角

娘むすめ　人ひとりの心のいちさやけ　嵐雪

小原雪の紙をふたへ　其角

小文庫

仏の本地を包むふくさて　翁

さらさらと白拍出ほうきき　山店

おそろしやの生る竹株　翁

[illegible]

白雲なる浦の浮ふの　北枝

篠へ伸てそそ月のくま　牧童

[illegible]

花美女盛り活る投て　其角

なひく柳のそ柳のしの　松濤

世の縁と遊世みのひさめ　蓉白

笈の記

赤ゝと鶴ある眉のきい　杏雨

結縁経のそそ稔るまい　杏農

あそさい経言の比の時鳥　落梧

本種をほそて皆雪のあり　北枝

米都ゆとうて咲くら花の会　助史

蓋　靴のいとのぬるる如　月園女

まつさよの草履つくひる花筵て　山人

秋の旅の味連歌いとかるふ　翁

面うち水く晴て富士入ある寺　荷兮

寂とさ林の葉の落る音　杜國

新よりの葉てうく葉の風　其角

鈴縄ふ鯉のさそ八ひく水　孤屋

屋のとうく紙ふるて　其角

垣穂のけ〻を嘉ハふりをて　翁

葛やあふ新ふ妹ら多なり兎　越人

けの雲ふ〻ら猫ふ毛　翁

絲勤の嘗ふ思ひうち海　枳風

待宵の清水流るるその中　翁

なよの轆轤のうきの壺　山代

秋尾花

、

清瀧は笠置寺のふかうきを　曾良

小袖をうつを逢る戒の師　不玉

月影の如く似るもなつかしき　翁

蹴鞠

、

猶寺に一日あそぶ人のうち　里圃

槻の角のさてぬ貴　宍　馬莧

濱出の牛よ俵をたこよ也　翁

東江寺伝

、

人はなかしきの暮このれ　曾良

松柏をあらし嵐の和ともなり　石雪

月の射さぬ鈴猪の家　翁

日光山寺伝

、

国弥生四日の三日月　露丸

つる新よちるまかるたる秋の雲　重行

孫を小惜とはきしき　翁

ひさこ
瓠の実の実かるとふ人々ありて　珍碩

親なかりして月よりのうた　、

秋の松宮ものうせるひるの　路通

大津の巻

、

撥を重ねて琴の糸ある　松洞

うゝをてる女よ別てはをはり事　寄香

矢負よ鶴のたえる意雅　公羽

ごくんの色

、

雷鼓鶴鳴の猪をまさぐる　猿雖

喧嘩の中を泣ぬよりく　雪芝

ちあそせと矢橋の船ふるさと　公羽

宇陀法師

、

松ちるゝ滝に流る月一雨　李由

左遷の松持刀ぬるよ舟便　許六

新し晩ゝの赤魚さびし　汶村

そふのの日

、

里人ホ蕨ゆ所ゝを秋の雨　越人

月なを波よ重石ぬく搖　羽立

こうひきる木の根よる花の軒とん　野水

顔寒

うら新す留も花の末かをそ　岱水

はるものとうふ鶏の卵ゆる　翁

まこ孫く隠者の冨をなつしそ　許六

主殿

絵ろ紙捌乃様ろ筋ろいく　翁

こうれ〳〵数を変るかんをし　露沾

志ろ留なのき紀念の数書も矢を　沾荷

主の日

、

温ひあるてらふるの温泉の山　翁

のるをや紫の袂伊勢の常　越人

内侍の撰む代くの屑の圏　荷兮

あるを

、

本堂ハ中くあるのはら建　正秀

羅漢の袂をゝ冨の絵ひぬ　珍碩

歯をいるむ人の姿を絵ゝて　正秀

元はぎく

咲るみてろく庁藪の恵　鈍雪

盗人ふせぎそそ〻妹る死を泣く　翁

行てるはきぬ閑〻の秋　曾良

あ〻世

、

木綿ふ咲るし形の杖　長虹

稗ち加れ人〻の奥　故及

世年まなて命の絡もあき　一井

ち能百貨

、

後住女きめ〻ちく　其角

ふ多〻乳を呑む猫の声出し　工齋

金を甲斐の椋ともえよ　枳風

元つ〻

、

ちをうまの俤　其角

ちちのや五江の海をえみて　溪石

元年の中待ふ本寺の麻元　琴風

歳暮

、

るゝえあをて芸笠をうよ　李由

ひとを屋の食屋えをもむ　木導

早麥ひのうゝむ苗代の風　朱迪

さうゝの

、

蛩をぬゝひよ訪ゝたゝん秋　翁

千ゝ屋ゝまさうゝ落る秋みし　去来

四ゝうゝて蓋のひなそぬま程　允兆

冬の日

、

血ゝゝゝれ玉ゝる月のゝゝゝ　荷分

空ゝゝのて女郷の達ちきゝ　杜國

ゝゝまゝ川紡を打ゝをたゝ　野水

さうゝの

、

摩耶ゝ高松ゝ冬のかゝる　野水

夕ゝゝゝゝかゝ四ゝさゝ吟ゝ風葉ゝる　允兆

軽の口ゝをかゝて手体ゝ紅　翁

ゝゝゝ

、

紗情のゝ情ゝ嘆ゝ山吹　鈴雨

春ゝゝ深ゝゝ七ゝの年八ゝ力石　翁

汲ていゝゝく酸ゝ井の水　露丸

月清て磯の根のほそうしや　嵐雪

人を見ぬ霧の海見あるる　虚公

傾城のさらしうる布あそんも　其角

、

夜岩のすき紅雲ちらしぬき　史邦

蹄をこのて車引ざらむ　凡兆

うち人を招穀場ちらせん　翁

、

冬の日

金婦の君の茅なんとさと　重五

籬牛侍津浦のあらよんぬく　荷兮

佛ふるまる魚ちきりう　翁

補、

あらさ三ぬ組

菜表ぬる松去へは　工山

笠ぬて夜の彼を潜りみれ　桐葉

秋の鳥の人吟をゆく　翁

、

已う光

安〻〻矢剛の海の系と乎浪　翁

多賀の扶るもいろのてらき　半残

手枕で男ものうく結ぶ夏　土芳

伊賀の巻

、鳥の巣をとる程あるき尾　翁

二月や寒り甲おもてにて　菓夕

ひのしほ光ふ雪の明星　曾良

水原の巻

、名月のおとうを少世の炭俵　翅輪

撞衣うきすく尼達の家　曾良

ひの月も炎ゆふ程かすみ　翠桃

赤元紙

、高田の雪舞てやむうつ也　其角

自然をとふ関の陸奥　嵐雪

さらし　なき風の石蕗ぞ　翁

郡懐紙

、宮待つ蕎よ世捨る秋　杉風

未だ居を訪ふかきる稲の家　濁子

鹿うち丈の庁器の冷擂　涼葉

山中の春

あくまで降るこの山蔭の寺　北枝

越女四人田舎わらべ　曽良

落ちゆく君の名ゆかしき　翁

わくらはの山

鶯鈴の尾を恢恢の風に揺られく　叩端

風に身を寄せきふる付花　桐葉

華やかなる木の陰を歩たるも　叩端

別所

山のかなたの下市の里　子珊

[illegible]

杉風

晴れ乃月もやすこあぶ影　桃隣

信濃の松本

[illegible]の[illegible]の[illegible]形る蛍の糞　黙界

[illegible]ばせの年の[illegible]覚　立志

[illegible]　野童

[illegible]秋葉

[illegible]る田の中の小田　嗒山

[illegible]て[illegible]　路通

[illegible]の思ひ浮世　人　翁

[illegible]

鳥羽玉の髪切女[illegible]　叩端

[illegible]ん[illegible]る葬の月　翁

[illegible]の[illegible]　桐葉

[illegible]

[illegible]酒　[illegible]　公羽

[illegible]の[illegible]音　野坡

稲盗人の縄[illegible]て[illegible]　公羽

俳諧集

、

蒟蒻の色の[illegible]　治蓬

[illegible]の数　曾良

[illegible]の[illegible]　翁

廣益紀行

、

[illegible]鳥の[illegible]　越人

[illegible]　杉風

[illegible]人を[illegible]　苔翠

、

縞の仕出しの流行草履　酒堂
月の新もえそくはなたの葉の若葉　諷竹
扶一本をまの紹介　何中

、
ゆくもとくよりの逢坂の杖　公羽
農用よりそ〳〵蹄て馬〳〵駕　卓袋
霧ふくをうり跡痛みをまて　木節

、
柊ふのゆ〳〵よ戒律の尼　調和

羽ぶきぬ年木の柴の輝の殻　立志
風ゆくそ〳〵日ゆゆ〳〵を降　直方

、
あゆほの人魚奥よ也　翁
百をの若をみ隆出を　丈艸
紡芽をこ〳〵搭答の蓋　惟然

、
清簾の角を垂ふさふ〳〵　丈艸
鶯ふ声〳〵鳴て百ふ〳〵を　路通

物の中へおろす　早稲　翁

こそこそを落として俗よくさそふ俗の
雅俗よあそこの愛し

聯句自他の事

硯をむつひさそふ捲ほす　自

秋の花咲そろひそろひ夕小ふ　時節

雑ふのふれと落く女郎　他

時節なし

むこのひ少ふ尼ら法やかるらむ　他

初風蕭々水のもとの系　其場

さろさろと辞のさめる明屋敷　自

時節なし

蕭木の霧のちらくと落　時節

巡礼のゑ抱をる朝の月　他

俗所用もちろ雑俗いき長　他の句

時のそくる紅赤うるの数　他の巡礼のあらひ

そのく衣も多の名残を　自あそ他の負むひ

時こんの郭路をたり

落瓦あしい松ゑ志はまつ　其場

皆ゑ志の名ゑ志ゆるゆゑの義よ　自

青苔の粥ふき出せる小ゑ加ゑ　他自ようこゝに生しゑる也

ゑるゆゑ志ゑ志の名ゑ志秋ちゑ　自自のゑふ自のゑを所ゑふを人の自のゑようゑ示し

ゑゑはゑ志ゑ寄めゑて粽ゆゑ　他

ゑゑる屋ゑ美ゑはゑゑ　他の自ゑ所

ゑゑゑ先語ゑむゑの下自ゑゑ　他の屋のゑゑられ

漆衣をゑゑの寄ゑふ要ゑ志ゑし　自他の屋へ自ひゑる之

ゑゑゑの外所ゑゑ

茅ゑなゑゑむ絲ゑ志はゑ形ゑ　自

人ゑゑも以ゑ結日中の清垣寄　他自ゑゑゑ生ゑゑる之

ゑゑゑ松ゑゑを自ゑゑゑゑゑる　他ゑゑ垣ゑのあゑられ

清ゑゑくゑゑちゑる屋根菅の塵　他の自ゑ所

ゑゑの外所ゑゑ

輝寒一二の濃　二のゑゑゑゑる　他

ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ　他絲つきのあ、ゑ

新ゑゑゑ我ゑ清世ゑあのゑゑ　自他のあゑゑゑゑゑゑ

ゑゑ所ゑゑゑゑゑ

あらしきそを鞆の浦のうまの　自

いのちかけの海の春　自

えよしを揺るかしの女房達　他（自うらよぶ出しうなり）

けふ踏うなちう

巻ゴ〳〵ふ貴もむうふを来ラ　他

うきを世の津もたのり紅葉　自（他へなびうなり）

両国をうてふ都も旅あるをや　自

解るを自他のうちち肝要なりうをうるの

特一をうつ人しけふ踏をちうしと

いつふ自他のうちちみして人情あく

踏をうなりうとうふ　其場　をう情のあらん　時を

時ふ　天相　けふ五ツをつをちうしも踏

人情なるおるこるはくふあく

人情のるを人情なるみてををむを

けうしうとうふ　こるの特せをるゆ人情

人情あるる二るはくおをちうんみをのはし

るうくをひ出してもくうかくを

をくをうふのをくるなをくのは

ると呼ふいあく　其場　をう場のはうん

はを　はふ天相と呼人多く

其場

抜出の手を門の馬はなれ

補　このたらふりをかる川筋

其情のあらはれ　赤くすみたる紅葉のさま

補　紅葉ふうんとる双方の石

時ふ　月いうとゝ〳〵入相の鐘

補　温泉の香よ星る朝ねさめき

時節　雨の絃門田の稲穂繽紛出く

補　時雨葉く時て通ることり

天相　雲之ろ〳〵空六向めく風高て

補　晴天よ有明月の新ほゝを

ゝろもも人情なるなるの

ゝ情しふ　野辺山海川あをゝ　祝　机戸蹟

ゝ情のあゝらはゝゝ

ゝ情よあゝくきものをゝ

ゝくて情よ時の雪紅りゝものをゝ

時節ふ　ゝ時ふゝ　雪歩日暮のゝ紅りゝ

天相ゝゝ　日月風雨陰晴のゝをゝ

又人事あゝて自ゝも他ゝもゝゝ

るあの降るゝて自ゝも他ゝもゝ

なの中ゝゝ

朝ゝゝ特ゝ特天特ゝく

ゝしゝ降ゝもゝゝちゝ

かく降る時ゝあゝも他のゝゝる新り

はなてかのるかち後戸川

うく弱るこゝろ有るも自のるふなるゆゑ
見弱るをもてをるの自他を定むる法こ

袒翁曰脉るのるやおるへかるべきこと
刈こるの特しこ

古人曰脉るのるやおるをうるふうとくこと
見まここるの特こ

鳥醉曰脉るハ有用めて学用学用ゆ
まて有用の所方をみりへしこ見れ
こるの特しこ

白雄曰巻毋のるくよく味ひて意門
脉るの意体をもて意こ

俳諧寂栞巻之中終